

月見月理解の

つきみづきりかいの

探偵殺人

たんでいさつじん

殺人鬼のいない夏

・三日目

◆八月三十日◆

騒々しいほどの蟬時雨が、陽炎の揺らめくグラウンドに降り注いでいる。

唐突に始まったこの奇妙な合宿も、ついに最終日がやってきていた。

京先輩は、今晩の勝負の仕掛けをするために朝早く合宿所を出て、昼過ぎに帰ってきた後は、部屋で寝っぱなしだった。

ほったらかしにされていた僕たちはといえば、京先輩が持ってきたゲームをやったり、かき水を作って食べたりと、比較的穏やかな時間を過ごしていた。

暑さはまだまだ続くだろうが、この夏休みの合宿としては最後の日。

理解は、何も変わった様子もなく過ごしている。

まるで——昨日僕が目にした光景が、ただの夢だったのかと思うくらいに。

「何、ぼーっとしてんだよ。君の番だぜ、れーくん？」

「あ、ごめん……」

理解に話を振られ、僕はふと我に返る。

昼食後からやることのなくなった僕たちは——昼寝をしている京先輩と、買い物に出掛け

ている水無月さんを除く全員が食堂に集まって、ボードゲームに勤しんでいた。

昔は単純だったボードゲームも、最近はルーレットやサイコロを振るだけじゃなく、色々な要素を持ったものがあるので、時間と人数がまとまっていれば、なかなか面白い。

今回のゲームはいわゆる『戦争ゲーム』だ。土地を手に入れ、設備を整え、兵を駆使し、拠点を広げてお金を稼ぎ、領土を手に入れる。

カードと駒、そしてお金の概念も含まれたゲームだが、書かれているイラストは二頭身のコミカルなもので、血腥いイメージはない。

まあ、初めてのゲームでも理解と交喙は強いので、必然的に僕と宮越さん、そして遥香がやられ役なるのが悲しいけど……。

「ま、いいさ。今晩のゲームでは本気を出してくれるんだろ？ れーくん。君も今度こそは負けたくねーだろうしな」

僕にボードゲームで攻撃を仕掛けながら、理解が含みのある声で言ってくる。

そう、既にペアを決めるくじ引きは終わり、今晩の肝試しで、僕はついに理解とペアを組むことになったのだ。

謎解きと、時間制限レースを含んだ、『肝試し』。

もちろん、仕掛けをした本人の京先輩は内容が分かっているので、細かいところは審判の水無月さんが手を入れて改造しているらしい。

個人的には内容よりも、あの京先輩がどれほどの無茶をしたのが、不安といえば不安なところだ。

「……そうだね」

少し逡巡した後、僕はそう呟く。

「今度は、勝つよ」

昨晚のような目にはもう遣いたくないということだけじゃなく、理解の意志に応えるつもりで、そう言ってみせる。

理解がこういう含みのある言い回しをしているときは、たぶん、僕に何か言いたいことがあるのだと思うから――。

「そうです、か」

と、僕の隣でゲームをプレイしていた交際が、ふっと息を漏らす。

「では、わたしもお兄さんからの罰ゲームで、色々なことをされてしまうことを覚悟しないといけません、ね」

「うわー。鬼畜だねー兄貴。っていうか、まさか妹の私にまで手エ出さないよね？ いくら

節操がないっていてもさー」

「ちよっと都築君。私たちに何するつもりなのよ!? まさか、そんないやらしいことを――」

「僕は何も言っていないでしょ!？」

まあ、実際のところ、次の勝負に勝ちたいのは、僕がみんなに罰ゲームで仕返しをしたい訳じゃなく、自分が逃れたいだけなのだけど。

「ただ今戻りました皆様、もうすぐ夕食の準備ができますからね」

買い物から帰ってきたらしい水無月さんが、笑顔で食堂に顔を出し、皆が顔を上げる。

その水無月さんと、一瞬だけ視線が合った気がして、僕はどきりとしてしまう。

ふいに昨晚の光景が、僕の脳裏に蘇ってきた。

*

「はい。理解、あなたが再び月見月の探偵としてこの依頼を――《ソディアック》の占い師、『月見月因果』の搜索任務を、受ける気はあるのか？」と

「……………」

月明かりの中、水無月さんの問いに対し、理解は沈黙する。

たつぶり十数秒が過ぎた頃、苦笑混じりの声が聞こえてきた。

「連中にはこう言っちゃれ、『はあ？ 死ねよ』ってな」

木陰に隠れていて理解の表情は見えなかったが、たぶん、いつもの笑みを浮かべているのだらうと僕は思った。

「なんで俺様が、あの変態コスプレ女を捜しにいかなきやならねーんだよ？ 大体——」

「今の生活では物足りないのでは？ というのが、久遠様のお言葉です」

「てめえの都合だろうに、イチイチ人に理由を押しつけるなよな、あの老害ジジイが」

ふっと理解が息を漏らすと同時に、辺りが静まり返る。

僕は一瞬、自分の存在が気づかれたのかと思って、慌てて息を止め気配を殺した。

「——理解。ですが、今回の依頼は強制ではありません。断ってしまっても一向に構わない案件です」

「そう言っておけば俺様が引つかかるとでも思ってたのか、おめでたい連中だな」

「そうですね」

水無月さんが柔和な笑みを返し、

「理解、あなたが受ける必要はないと思います。少なくとも、以前のような生き死にに直結するような危険な任務——あるいは月見月の機密情報に関する任務は回って来ないと言っています、例の通り信用できませんからね」

「……………」

「ですが……一応、返事をお待ちします。明日の夜、私が帰る前に伝えてください。あなたが『普通』になって三ヶ月が過ぎた、今の答えを——」

しばしの沈黙。

次に、ふたりが合宿所に戻ると気づいた僕は、音を立てないように慌てて中に戻る。そして、よく眠れないまま、一夜が過ぎた。

*

「ふむ、この料理を食べられるのも今晚が最後か。残念だな」
食堂で水無月さんの作った夕食を食べながら、京先輩がそつ呟くと、

「お褒めに預かり光栄です。またこちらに来られそうなきは、ご連絡致しますね」

「……………」

僕はミネストローネを飲みながら、水無月さんの笑顔をそつと眺める。

その言葉の真意は、理解に依頼を持つてくる、という意味なのだろうか？

『月見月因果』。

初めて聞く名前で、月見月家、《ゾディアック》の一員らしいが、今は行方不明になっているというそいつが何をしているのか、何故理解にそいつを捜す任務が回ってきたのかということは、昨晚からずっと気になっていた。

気にしても仕方がない。

実際、その話に僕の意志が介入する余地はないだろう。

「だけど、僕は――。」

僕は理解に、どう答えて欲しいのだろうか？

そのまま、合宿最後の夕食が終わり、軽く食休みを挟んだ午後八時。

僕たちは誰もいない夜の特別棟へ向かい、最後の勝負を行うことにした。

「では……、いよいよこの合宿の最後を飾る勝負。肝試しを始めるのでしょうか？」

真つ暗な校舎――特別棟の入り口から十数メートル手前で、京先輩が高らかにそう宣言する。

「見ろ、今宵の月も私たちの戦いを待ち望んでいるぞ」

「……なんか雲行き怪しいんですけど、大丈夫ですか？」

ちなみに、先ほどの天気予報では、雨が降るかもしれないと言われていた。

月は雲に隠れて全く見えないので、懐中電灯がなければコースの走破すら困難だろう。

何気に難易度の高い勝負になりそうだ。

「あのメイドさんには、既に皆を脅かすための配置についてもらっている。ペアのスタート順は、前もって決めた通りだ」

この『肝試し』の要素は、大きくふたつに分かれる。

ひとつは、決められたコースを時間内に回るといふ、『競走』。

制限時間を過ぎれば自動的に敗北となり、複数のペアがゴールまで辿り着いた場合は、

そのタイムの優劣で勝者のペアが決まる。

コースの途中には三つのスタンプが置いてあり、勝手なショートカットや、誤魔化して途中でゴールに帰ることはできないようになってる。

そしてもうひとつは、『謎解き』だ。

コースの要所に現れる関門には罠があり、注意してそれを避けないと、進行が遅くなるようにできているらしい。

暗い道だから、走ってタイムを縮めることは難しいので、途中の謎解きも含め、色々な意味で度胸が試されそうなゲームだ。

「それじゃ、まずは私と宮越先輩つすねー。んじゃ、行ってきますー！」

この勝負に関しては、今までのように同時進行はできないので、現在肝試しを行っているペア以外は、スタート地点で自分たちの番を待つことになる。

「ちなみに、これって何分くらいかかるコースなんですか？」

暇なので、隣に立っていた京先輩にそう尋ねると、

「なに、徒歩で往復合わせて十五分といった程度だ。もつともそれは、途中での謎解きや罠を、ある程度スムーズに攻略できたらの話だがな」

「……………」

京先輩の自信あがりな笑みに、僕は不安を覚える。

これは、完全に邪なことを考えている目だ。

かつて先生たちにドッキリを仕掛けようとしていた、あのときと同じ匂いがする。

「理解……。本気で警戒しておいた方がいいかもしれないよ？」

スタート地点に座っている理解にそう耳打ちすると、不敵な笑みが返ってくる。

「なんだ、れーくん。ひよつとして怖いのか？」

「……いや、そんなことはないけどさ」

ない、と言いつかれるとは思う。

最後に肝試しやったのって、たぶん小学生の頃だろうけど。

「キアアアアアアア！」

「つ……!?」

甲高い悲鳴が、校舎の壁を通り抜けて聞こえた瞬間、僕は思わず顔を上げた。

「あれは……」

宮越さんと遥香の声……には違いないだろうけど、異様だ。

交喙も同じものを感じ取ったのか、怪訝な目つきで校舎を見上げている。

「どうやら、今回も簡単ではなさそうです、ね」

ふたりの悲鳴を聞いても平然としている理解と京先輩を見ていると、交喙の反応がすごく恋しくなった。

「はあ……、はあ……!」

悲鳴から七分後、憔悴しきった顔の宮越さんと遥香が、スタート地点に戻ってきた。

「お帰り……って、何でそんなに汚れてるの?」

見れば、ふたりの服は土で汚れていた。ただ転んだにしては、ちょっと不自然なくらいに。

「それは都築君も味わうといいわ……。もう、最低」

「とりあえず、スタンプはゲットしたっすよ……」

遥香が差し出したスタンプ用紙を、京先輩が確認する。

「ふむ、ギリギリとはいえ、よくぞ時間内にゴールできたものだな。それでこそ我が放送部の一員だ」

ふたりとも部外者です。とは、もう突っ込まない。

「途中から、もうゲームが終われば何でもいいと思ってたわ……」

乾いた笑みでベンチに腰掛けた宮越さんは、そのままぐったりと動かなくなった。

「交喙君、では、我々もスタートするでしょうか?」

「京元部長は、仕掛けについては知っていますよ、ね?」

やる気満々で立ち上がった京先輩に、交喙がそう声を掛けると――、

「ふっふっふ、まあそうだな。仕掛けの位置や内容は変更されているが、それでもある程度のアドバンテージは得ていると言っているだろう。よって……」

と、京先輩は手ぬぐいとロープのようなものを取り出し、僕に手渡してきた。

「何ですか、これ？」

「これで私の両腕と口を封じたまえ。ちよつとしたハンデというものだ」

何もそこまでしなくてもいいのにと僕は思うが、京先輩が言い始めたらきかないことはよく分かっているので、言うとおりに両腕を縛り、猿ぐつわを噛ませる。

どうでもいいけど、これってすごく絵的にまずいような気がする。

万が一先生とかに見つかったら、どうなるのだろうか。

そんな意味での肝試しはしたくないというのに。

「へは、ふっふががが」

「では、行ってきます、ね」

怪しいスタイルに変貌した京先輩を、交喙が引きずっていくのを見送る。

そして、僕は青ざめた顔の宮越さんと遥香をよそに、曇天の空を眺めていた。

近いうちに、ひと雨来るかもしれない。

そんなことを思いながら。

*

「ただ今、戻りました」

スタートから十三分後、交喙と京先輩が帰ってきた。例によってふたりとも泥だらけで、ジャージ姿の交喙はほつとしている様子だった。

「ふう、あのメイドさんには恐れ入ったぞ。まさか私の考えた罠をあ応用してくるとはな。私の体力と交喙君の知力が無ければ、到底生きて帰って来ることはできなかっただろう」

「これ……、ほんとに肝試しなんですか？」

もはや突っ込むことが野暮かも知れないと僕は思ったが、それでも聞かずにはいられなかった。

「お兄さんも、お怪我をしないよう気をつけてください、ね」

疲れを滲ませる交喙にそう言われると、さすがに僕も不安になる。

タイムは、宮越さんと遥香のペアが『十四分十五秒』、京先輩と交喙のペアが『十三分三十秒』だから、そのふたつのペアより先にゴールできれば、僕と理解の勝利となる。

特に、僕は今回のゲームで半ば意図的とはいえ一度も勝っていないので、今度こそは負けたくないと思う——、でも。

「それじゃ行くぞ、れーくん。怖くなったら君に抱きつくから、どさくさに変なところ触ってもいいぜ？」

「僕は暗闇で君が何をしてくすかの方が、よっぽど怖いけどね……」

理解の軽口にそう答えつつ、内心僕は緊張を高める。僕が今からやらねばならないことは、ふたつある。

ひとつは、このゲームに今度こそ勝利すること、そして――。
「では、行き給え。君たちが最後のベアだ」

「行こうか、理解」

僕は懐中電灯を手に取り、先導するように一歩先を行く。

スタンプカードを手にした理解が、そのすぐ隣に並び、歩き始めた。

こうして、最後の『肝試し』が幕を開ける。

そして僕が『月見月の依頼』について、理解に尋ねる最後のチャンスも、ここから始まった。

*

「くっ……!!」

特別棟への道を歩き始めて十数秒。

振り返って皆の姿が見えなくなると、やはり気味の悪さが先に立つ。

スタンプカードの裏には大まかなルートと地図が記されているので、コース上に何がある

かは大体分かる。まずは裏口から特別棟に侵入し、入り口でスタンプを押すのが最初の目標だ。

「理解。足の調子は大丈夫？」

暗闇の中だから走るのは危険だけど、なるべく早く早く歩いた方がいいと思ひ、僕はそう声をかける。

「平気だよ。君が急ぎたいなら、早歩きでもしようか？」

懐中電灯で校舎への入り口が照らされると同時に、理解は一足先に進み出る。

それ追いかけようとした瞬間、「うわっ!」という悲鳴と共に、理解が消えた。

「えっ……!!」

一瞬、頭が混乱する。

懐中電灯の明かりは、確実に理解とすぐ側の入り口を捉えていたはずだ。

なのに、理解はどこへ消えてしまったというのだろう。

「理解!? どこに行っただよ。からかっているんならやめてくれよ!」

「れーくん。そこから動かない方がいいよ?」

正直、焦った。

焦って闇雲に懐中電灯を振り回して、駆け出した瞬間、重力が消えた。

「なっ……!!」

直後、咄嗟に伸ばした手足に、柔らかい土の感触が伝わる。僕が落ちたのは、少し深めに掘られていた地面の穴だった。

「はあ……。君らしくないね、その慌てっぷりは。ちよつとは落ち着きなよ」

「痛たたた……」

転んだ拍子に、懐中電灯を落としてしまったらしい。

暗闇の中で、僕は理解と共に罅にかかってしまった現状を把握する。

「これ……、落とし穴？」

「そうみたいだね。……よつと」

落とした懐中電灯を拾い上げ、理解が僕の顔を照らす。

いつの間にか、理解の雰囲気が普段と違っていることに気づく。

普段の理解らしくない、僕とふたりきりのときの性格に。

理解は僕のところに戻ってきたとき、こう言っていた。

誰とも敵対する強気な理解も、そうじゃない性格の理解も、どちらも本当の自分だと。

そして今はやはり、自分は『理解』の性格でしか、他人と向き合えないのだと。

だから、僕とふたりきりのときには——、もうひとつの自分を見せてくれると言っていた。

人は、相手や状況によって『顔』を使い分ける。だけど、それは必ずしも偽っている

という訳じゃない。どちらも理解には変わらず、同じものだと、僕はそう思っている。

だから、僕も普段と変わらない態度で、彼女に接することに決めていた。

「ごめん。忠告してくれたのに」

僕は、先に落ちた理解の上に覆いかぶさるような格好になっていた。

薄い黒地のキャミソールを通して、彼女の体温と心臓の音が伝わってくる。

「それはいいから、先にここから出て助けてくれないかな？ 君がどいてくれないと、私も

動けないよ」

「うん。ちよつと待って」

とりあえず、落とし穴の底に手をついて起き上がろうとすると。

ふにゆ。

という、微かに柔らかな二の腕の感触が、僕の手のひらに返ってきた。

「あ……。やあつ……！」

「ちよつと!? 何変な声出してるんだよ!？」

「あははは。君は可愛いなあ、もう」

暗闇の中で、理解がニヤニヤと笑っているのが見えなくても分かる。

こういうところは、性格が悪い方の理解と変わってない。

「笑ってる場合じゃないでしょ!？」 あんまり時間がないんだからさ」

「まあ、そこを見事につけ込まれた訳だけどね、私たちは」

「え——？」

暗闇の中、理解の手をつかんで引き上げると、静かな声が返ってくる。

「私と君は、帰ってきた泥だらけのペアを見て、土で汚れるような畷があると思つてた。でも、今回は校舎の中を出入りするコースだ。後始末のことを考えて、土で汚れそうなギミックは帰り道に仕掛けられていると考えただろう？」

「……………」

それはそうだ。おそらく深く意識せず、僕も同じことを考えていたのだろう。

だが、実際に畷は帰り道でなく、行き先に仕掛けられていた。

僕たちがそう考えることも見越してのトラップだったのだ。

京先輩が水無月さん、どちらのアイデアかは知らないけど、これは気合いを入れてかかなくてはならないかもしれない。

もはや肝試しでもなんでもない気がしてきたけど……。

とりあえず落とし穴から這い上がると、下駄箱でひとつ目のスタンプを押し、靴を履き替えて特別棟の中へ入ることにする。

「ところで、れーくん。さっき落ちたときに足をくじいちゃったんだけど。おんぶでもしてくれないかな？」

校舎に入るなり、理解がそんなことを言つてきた。

「……………ほんとに？」

「ほんととほんと、懐中電灯とスタンプシートは私が持つからさ」

どうも楽をしたいだけじゃないかとも思うけど、一応僕は理解をおぶつてやることにする。

理解の体はかなり軽いから、それ自体は楽にできる。

「あはは。懐かしいね、れーくん。また車椅子のときに戻った気分だよ」

理解がどこか嬉しそうに言いながら、ぎゅつと、僕の首に回した腕に力を入れてくる。

理解の滑らかな肌がびつたりと吸い付いて、僕は何ともいえない気分になった。

「暑苦しいから、あんまりくつつかないでくれない？」

「照れてるの？ 相変わらず君は可愛いなあ」

「……………」

もう反論してもしょうがないので、先に進むことにする。

廊下には、薄いビニールシートが敷かれており、多少の土汚れは問題なさそうだった。

僕たちは階段を上がって、次のチェックポイント——理科準備室へと向かう。

理科準備室。本来あまり入ったことのない上に、人気のない深夜ともなればその怖さも尋常ではないのだけど、今回に限つては変な薬品が撒かれてないだろうかとか、そっちの方が怖く感じるから不思議だ。

「えっと、あつたね」

思ったよりあっさり、次のチェックポイントであるふたつ目のスタンプが見つかった。スタンプは下駄箱にあったものと同じく、紐で宙吊りにされている。

「……………」
懐中電灯で、理解が暗い周囲を探る。今度は足下に何もなさそうだが、一枚の張り紙が、スタンプの前の机にあった。

書いてあったのは一言——、『床に気をつけろ』。

「どうしようか、これ…………？」

おそらく、何らかの罠があることは間違いないだろうが、ぐずぐずしていると遅くなる。

「……………」

ほんの僅かに逡巡してから、理解は「もう足は大丈夫だよ」と、僕の背から降りると、そっと、扉の外に視線を向けた。

「んん、水無月が何かしてくるかもしれないから、私は外を見張ってるよ」
逃げたな…………。

正直なところババを引かされた気分だったが、気にしてもしようがない。

そう思つて紐付きのスタンプを押すと、同時にカチリと小さな音がして——、

「えっ…………？」

ぱたぱたという音と共に、何か黒い物が降ってきた。

十円玉程度の大きさの平べったい物、懐中電灯で照らすと、その正体が明らかになる。黒い虫だった。

あのひと夏の思い出に恐怖を添える台所の悪夢が、僕の体に降りかかっていた。

「いやああああああ!？」

瞬間、僕の鼓膜が破れるかと思つた。

「助けてえええ!? 誰かああああ!？」

「助けて欲しいのは僕だよ!?」ってか、何一足先に逃げ出してるのさ——

虫塗れになりながら涙目で振り払う僕を尻目に、理解はくるりと周囲を一瞥し、

「怖がり過ぎだよ、れーくん。それは偽物だって」

「え…………？」

平静を取り戻してから、床に落ちた虫の一匹を見てみると、完全に分かった。

おそらくゴム製品の玩具だろうけど、この薄暗さじゃ本物と区別がつかない。

「ベアの悲鳴が聞こえてきたのは、時間的にこの辺りだったからね。警戒して正解だったよ」
どうやら理解は、今度はしっかりと罠を見抜いていたらしい。

『床に気をつけろ』という書き置きが、上から降ってくる仕掛けを見破られないための、フエイクであることも。

「そして——、君に対して罠が作動したのも見たけど、どうやら手動スイッチじゃないみた

いだ。私が大声出して驚かそうとしたけど、反応した気配もないし、たぶん水無月は、三つ目のスタンプのところで待ってるんじゃないかな」

そして、僕を生贄いけにえにして様子を窺うかがう段階で、色々なことを把握はあくしていたようだ。さすがと言わざるを得ないが、分かっていたなら言っていて欲しい。

どうせ僕の慌あわてる様が見たかつたからとか、そんな言葉が返ってくるんだらうけど。「さ、行こうかれーくん。もう時間も七分過ぎてるしね」

僕が玩具おもちゃを払いのけ終えると、理解は一足先に歩き出す。

僕たちは特別棟を出てグラウンドに向かい、最後のチェックポイントである、体育倉庫を目指すことにした。

今ももう使われていない古い倉庫なので、何か凝こった罫わなが仕掛けられている可能性が高い。

早いペースで倉庫前に辿たどり着き、扉を開ける。

足下、天井、左右。様々な場所を注視しつつ中に入り、細心の注意を払って倉庫内の電灯を点けた。

様々な用具の真ん中に、机とスタンプが置かれている。

「……おかしいな」

「そうだね」

何も無い。上も下も、今度は仕掛けもないからこそ、逆に怖い。

しかし、何かがあるはずなのだ。ここさえ終われば、後はゴールに帰るだけなのだから。

「じゃあ、今度は理解がスタンプ押ししてくれる？」

「いいよ」

そう言っ理解が一步を踏み出した瞬間、くじいた足のせいとか、ふらりとその体が傾かたいた。

「危ない！」

慌あわてて抱き留めると、その隙すきに僕たちの背後の扉が閉まり、がちやりと音がした。

「な——！！」

ドアの向こうから、素早く足音が遠ざかってゆく。

一瞬、思考が停止する。

この倉庫の鍵は外側にしかない。ここに入ってしまった以上、もう僕たちが出る術すべはない。

「ふう、やられちゃったみたいだね」

僕に支えられたまま、理解がそっと笑ってみせる。

とりあえず目の前のスタンプを押すと、その机の上に、一枚の紙があった。

書いてあった内容はこうだ。

『宝箱の鍵をこの倉庫内から探して、箱の中にある紙に書かれた電話番号にコールしてください。そうすれば扉を開けに行きます』

一応、携帯電話は各自持って行くように言われていたから、可能なシステムだ。

だが、軽く倉庫内を見回してみたところ、小さな南京錠付きの宝箱はすぐ見つかったが、近くに鍵はない。

この鍵を探すというのが、最後の関門なのだろうか？

でも、この埃臭い体育倉庫の一体どこに――。

「れーくん。私が開けてあげるから、さっさとその箱を貸してよ」

倉庫の中に転がっていたらしいための針金をつまみ上げて、理解がそう言ってくる。

「って、その針金で開けるの!? もはや謎解きでもなんでもなくない!?」

「今回は勝ちたいんでしょ、れーくん? つまんないプライドに拘っていいのかな?」

薄笑いを浮かべて、理解が曲げた針金を鍵穴に突っ込む。

それをただ見ているのも芸がないので、僕は周囲を調べることにした。

隠す場所。こんな埃臭くてごちゃごちゃしている場所のどこに鍵が隠されているのだろう

と、僕は思ったけど――。

「……っ!?」

突然、何かが閃いた。

言うなれば、奇妙な違和感が、スタンプを押したときにあった。

最初の落とし穴といい、次の虫の罠といい、これまでの罠はスタンプを押す直前、または

同時に罠が起動していた。

なら――、今回も、スタンプにまだ秘密があるんじゃないだろうか？

たった今押したばかりのスタンプを注視すると、構成している部品の繋ぎが、心なしか緩くなっているような気がした。

「まさか――」

僕の直感が当たった。スタンプの胴の部分をはねると、中が空洞になっていて、そこから小さな鍵が落ちてきた。

腕時計を確認すると、残り時間は五分。今から戻れば、余裕で一位になれる状況だ。

「ねえ、理解! 鍵を見つけたよ!」

急いで声を掛けると、何故か理解は宝箱を放置して、古びた跳び箱に腰掛けていた。

「あはは。鍵見つかつたんだ。よかったね、れーくん」

その朗らかな笑顔に、僕は直感的に嫌なものを感ずる。

「……って、どうしたの? それ」

机の上に置かれた針金はさっきより短くなり、宝箱の鍵穴は埋まっていた。

「いやー、この針金思ったよりもろくてさ、途中で折れちゃったんだよ。てへっ」

「てへっ! じゃないよ!? 完全にここから出られなくなっちゃったじゃない!」

そういえば、初めて理解と会ったときの一週間も、こんなことをした気がする。

「れーくん。それじゃ、次はこの箱をぶっ壊す手段を考えようか? 地面に叩きつけると

か——」

笑顔で宝箱を掲げてみせる理解に対し、僕はふう、とため息を漏らす。

「——もういいよ。雨も降り出してきちゃったみたいだし、さ」

そう。さつきから降りそうな気配はしていたが、今は完全に雨音が倉庫の中に入り込んでいた。夏場の雨らしく、スコールのような強いにわか雨だ。

「君らしくもないね。最後まで勝負を捨てないのが、君の本質じゃないのかな?」

「この暗がりであんなところを、くじいた足で走ったら怪我するよ?」

「大丈夫だよ、これくらい——」

「そこまでするほどじゃないし、いいよ。君は今までずっと無理してきたんだろ? だってその——、せめて僕の前くらいでは、あんまり無理して欲しくないから、さ……」

この最後のゲームで負けることになる。

そうなるとしても、僕は理解に無理をさせたくなかった。

今までずっと、無理を無理と思わずに生きてきた理解。

だからこそ、こんなときにまで辛さを押しつける気は起こらなかった。

沈黙を、倉庫の屋根を打つ雨音が埋める。

座れそうなどころに腰を下ろしたまま、しばらく時間が過ぎて——、

「そういえば、れーくん。君にひとつ、言っておきたいことがあるんだ」

静かに響いた声に、僕はどきりとする。

直感的に、その話に想像がついた。

「私、実はね——。月見月家から、依頼を受けないかって言われてるんだよ」

「……………」

僕はなんとやっていいか、に答えられない。

「ねえ、れーくん。私は、『月見月理解』に戻った方がいいのかな?」

「どうして?」

「……私は、何もできないから、さ。料理もうまくならないし、泳げもしないし、満足に歩けもしない。現に、こうして最後の勝負でも、君の足を引っ張ってしまっている。月見月の後ろ盾を持たない私なんて、どうしようもないんじゃないかと、たまに思ってる」

理解が苦笑する。そして、

「私の《無数に扉のある高座》はもうとっくの昔に、復活してるしさ」

どことなく寂しそうな顔で、そう言ってみせた。

それが嘘か本当なのか、僕には分からない。

だけど、その気になれば、理解は月見月に戻れる。今までと同じ待遇とはいかなくても、少なくとも関わり続けることはできるだろう。

でも——。

「君の好きなようにしていいよ。もう、巻き込まれるのは慣れっこだし。僕としてはもう、危ないことも、辛いこともして欲しくないけど、でも、君がそれを望むというのなら、できることなら付き合っただけよ。ただ……」

一度言葉を切って、僕は続ける。

「ただ、僕は、君が自分のため以外に、何かをすることを望んでなんかいない。あのとき僕の前に戻ってきてくれただけで、あの一言を言ってくれただけで、僕は救われたから——」

「……………」

「理解。僕は君に、感謝してる」

「そっか……」

理解はすつと力を抜いて、丸めたマットに座っていた僕の前にやってくる。

「その……僕の方こそごめん。本当は、みんなや君のことについても、色々フォローしてあげたいんだけど——」

「寒いね、れーくん。雨のせいかな？」

ふいに背中を向けると、理解は座った僕の上に、そつと腰を下ろしてきた。

着ているのは薄手のキャミソールなので、露出した白い肌の感触と体温が、僕の体の前面に伝わってきた。

「実は、《無数に扉のある高層》の能力が戻っても、私にはひとつだけ分からないものが

あるんだ」

「え……………」

「君の本心だよ。れーくん。君が誰に対しても優しいのは、一番好きなどころだけどね。私はそれが一番嫌いでもあるんだよ」

理解の言っていることは、何となく分かる。

「君は父親の事件から数年経った今も、自分が何かを得てはいけない人間だと思ってる。だから、誰に対しても求めない。そして、踏み込まない。違うかな？」

「……………」

違う、とは言い切れなかった。

僕は自分の考えてることが分からない。

だからこそ、そんな状態で人に『本気』を伝えることができないんじゃないだろうか。

「れーくん。君は本当に私に感謝してるの？」

「うん」

「じゃあ、その思いを私に伝えてくれないかな？」

「え……………」

くるりと、僕の膝の上に載せた体を反転して向き合い、理解が顔を上げる。

「君が本当に私を必要とするなら、それを証明して欲しいんだよ。そうしないと、私は

月見月家に戻っちゃうけど？ それでもいい？」

「……そういう言い方は、ちょっと卑怯くさいと思うけど？」

「私は卑怯だよ？ 君と同じでね」

そう言っつて、理解は穏やかに目を閉じて、くつつけていた胸を少し離す。

「えっと……」

仕方なく、僕はその長い前髪をそつと手で払って、

静かに、理解の額に口づけた。

「嬉しいよ。れーくん」

数秒後、目を開けた理解が、微かに頬を染めて微笑む。

「やつと初めて、君の方からキスしてくれたね？」

そういつて、ぎゅつと僕の体にしがみついてくる。

「——！」

あまりの恥ずかしさに、僕の心臓がどくどくと激しく脈打っていた。

「でも、まだまだ足りないよ。鍵を開けてもらうまで、続きしよつか？」

「つて、これ以上ここで何をするつもりなんだよ!? つていうか、時間過ぎてるからみんな

心配して来るかもしれないし——」

僕が取り乱した瞬間、ガンガンと、外で扉を叩く音が聞こえてきた。

「ちよつと、都築君!? 大丈夫なの？」

「うむ、予備の鍵はあるから、開けさせてもらうぞ、では——」

「うわっ!?!」

慌てて身を引いた瞬間、僕は座っていたマットから滑り落ち、その上から理解が覆い被さる。

ちよつと体育倉庫の扉が開かれた瞬間、皆がそこに集まっていた。

「……初君。神聖な旧体育倉庫で何をやってるかと思えば、まさか勝負をそつちのけで

組体操に励んでいたとはな。成長したものだ」

「いや、誤解ですつては!? 針金が鍵穴に詰まって、箱が開かなくて——」

「危なかつたです。もう少しでお兄さんの貞操が奪われるところでした」

「時間を過ぎて来ないから心配して見に来たのに……、見損なつたわ!?!」

「だから——、つてそつといえは水無月さんは？」

体育倉庫の鍵を閉めたのは、おそらく彼女なのだから、この異常に真つ先に駆けつけると

思つていたのに——。

「はい、ここですよ。初様」

「ぶっ……!?!」

見れば、水無月さんは扉の反対側、ちよつと体育倉庫の壁の向こうにいた。

僅かに空いていた隙間から、ビデオカメラを構えて、

「何をやってるんですか、水無月さん!」

「初様は意外と大胆なのです。おかげでいい絵が取れました」

「つてか、ずっとそこで見てたんですか!? なら助けてくださいよ!」

「はー、れーくんがあんまり求めてくるもんだから、うっかりゲームのことなんて忘れちゃったぜ、なあ?」

「いや、君が足をくじいてたから、仕方なく雨宿りを——つて?」

僕の言葉に、理解がにやりと笑みを浮かべながら立ち上がる。

痛めていたという足など、何事も無かったかのように。

「あ——」

僕はそこで、ようやく気づいた。

普段あれだけ鋭い理解が、この体育倉庫でのスタンプの仕掛けに気づかなかったこと。

そして、針金がタイミングよく鍵穴に詰まったこと。足をくじいていなかったこと。水無月さんが隠れて、この倉庫内のやりとりをビデオに撮っていたこと。

「相変わらず君は甘いね、れーくん。ごちそうさま」

いつもの邪悪な笑みを浮かべて、理解が下唇をべろりと舐める。

やられた。と、僕は気づく。

つまり、これ自体が仕掛け、僕に手を出させるための、理解の演出だったのだ。

「しかし君は相変わらずお堅いなあ。せっかく既成事実を撮影して見せつけてやろうと思っただけだよ。全然乗って来ねーんだもん」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら、理解は得意げに告げる。

その背後で、「ちよつとどういうことよ!」と、食って掛かる宮越さんや、面白そうなお目を見つけた顔をする京先輩、呆れた様子の子の遥香、ジト目の交喙の姿が見える。

「いや、だから僕は——!」

しどろもどろになりながら、みんなに言い訳していると、ふいに僕の背後で、理解がぼそつと呟いた。

「あ、そうそう、月見月の依頼なんて別に受けねーよ。危険のない仕事なら、水無月の顔を立って、やるふりでもしてやるけどな。なんせ、俺様を愛してくれる他ならぬ君のためだから、一応気は遣っておいてやるさ」

そう言っ、してやったりといった会心の笑みを、理解は見せた。

本当に、コイツは悪魔のようなヤツだ。

理解は以前僕を一番の嘘つきだと言ったが、実際、まだまだ僕は敵わないと思う。そんな日常が、これからもきつと続いていくのだろう。

殺人鬼のいない夏は、もう終わりそうだけど、まだしばらくは、僕たちの間で波乱の日々

が続くのだろう。

その後、肝試しの勝者である京先輩から言い渡された罰ゲームは、このコースの後片付け。そして、交喙からは、冬にやる合宿の幹事を僕が務めて欲しいという命令だった。

最後にとんだ爆弾を置いて行かれたと思いつつも、どこかでそれを少し楽しみにしている僕がいる。

そして、「ひとりじゃ大変でしょうから」と、片付けを手伝おうとしてきた交喙に対し、理解は、「また点数稼ぎか?」と、邪悪な笑みで小競り合いを仕掛ける。

結局、宮越さんや遥香も、最終的には片付けを手伝ってくれたので、この夜は最後まで、騒がしさが消えることはなかった。

雲が晴れた夜空を見上げると、月が皓々と辺りを照らしている。

少し遠くで、打ち上げ花火の音が聞こえてきた。